

30. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字八ノ前 554 番外 3 筆

調査原因 工場建設

調査期間 令和 3 年 6 月 29 日

1. 調査経過

比留田遺跡は家棟川の氾濫原の自然堤防上に位置する弥生時代から江戸時代までの集落跡と周知されている。

調査地は比留田の集落の北東端に位置する。調査は工場建設に伴う試掘調査で、独立基礎の基礎部分 3 カ所に調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。なお、工事の計画深度である GL-1.6m（標高約 85.0m）を超える掘り下げは行っていない。そのため、調査区 1・2 では地表面下 1.5m まで重機で掘り下げたのち、人力で L 字形に計画深度まで掘り下げた。調査区 3 は重機で計画深度まで掘り下げた。

2. 調査成果

調査区 1 は上から盛土、にぶい黄褐色粘質土層、緑灰色シルト層、灰色粘土層、灰オリーブ色粘土層、灰オリーブ色砂層、暗緑灰色粘土層の順に堆積していた。調査区 2 は上から盛土、緑灰色シルト層、にぶい黄褐色粘土層、暗緑灰色粘質土層、暗オリーブ灰色砂層の順に堆積していた。調査区 3 は上から表土、盛土、灰色粘質土層、オリーブ灰色粘土層、灰色砂層の順に堆積していた。

調査地に西接する道路の向かい側の地点で実施した平成 2 年度の調査⁽¹⁾では、標高 85.6m で 2 条の堀を伴う遺構面を確認している。調査区 1 で確認した灰色粘土層上面が平成 2 年度の遺構面と符合するが、遺構は確認できなかった。調査区 2・3 では遺構面を確認できなかった。また、全ての調査区で遺物は出土しなかった。

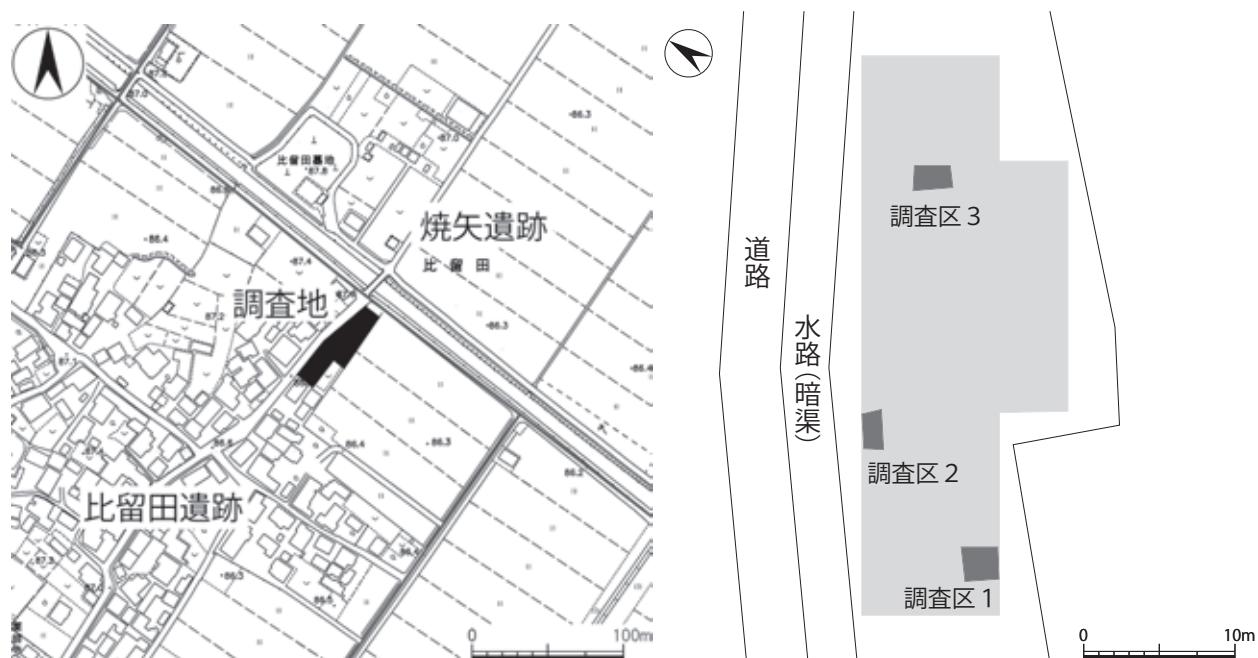


図 1 調査地位置図・調査区配置図

3.まとめ

平成2年度の調査で確認した堀の下端が本調査地側になるにつれて低くなっていること、本調査地の東側に広がる水田のレベルが平成2年度の調査の遺構面よりも低いことを考慮すると、道路付近から本調査地側にかけて地形が落ち込んでいるとみられる。そのため、工事の計画深度内で遺構面が確認できなかったと考えられる。
(芦塚)

(1) 中主町教育委員会 1992 「比留田遺跡第2次発掘調査」『平成2年度中主町内遺跡発掘調査年報』

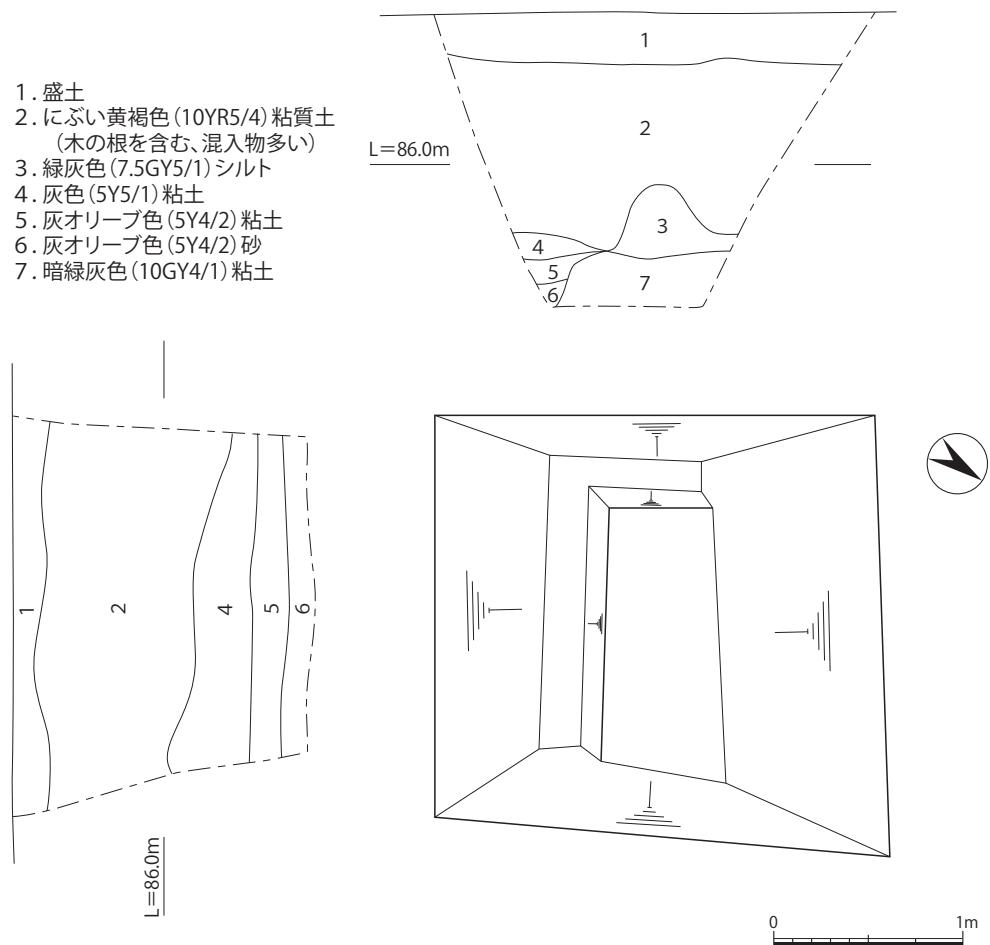


図2 調査区1平面図・土層断面図

30. 比留田遺跡

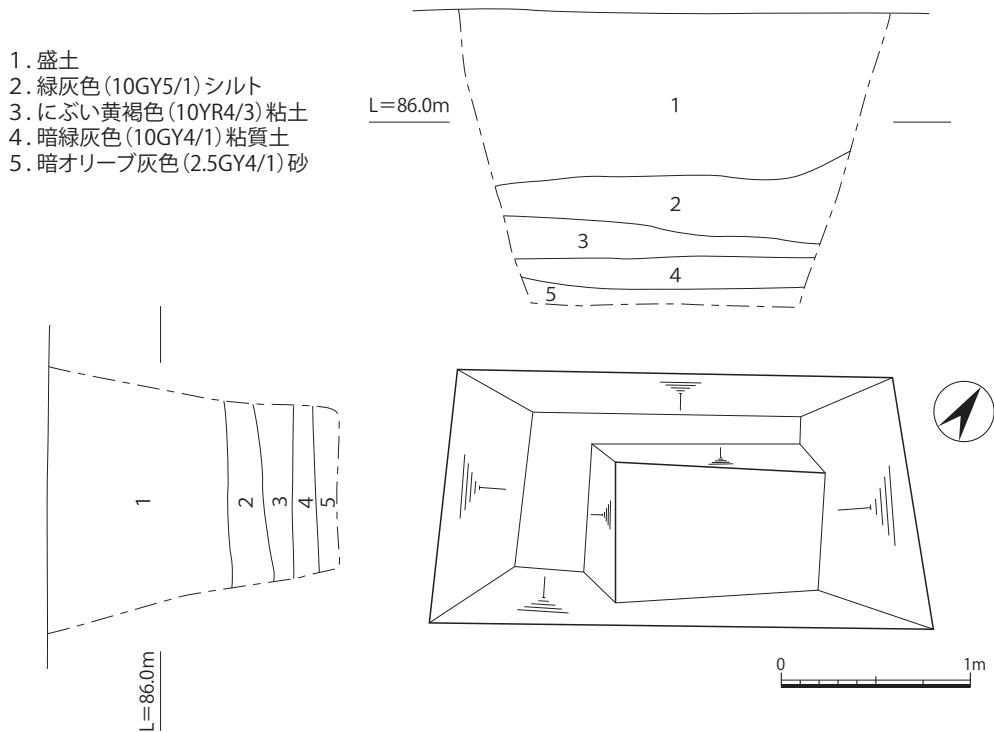


図3 調査区2平面図・土層断面図

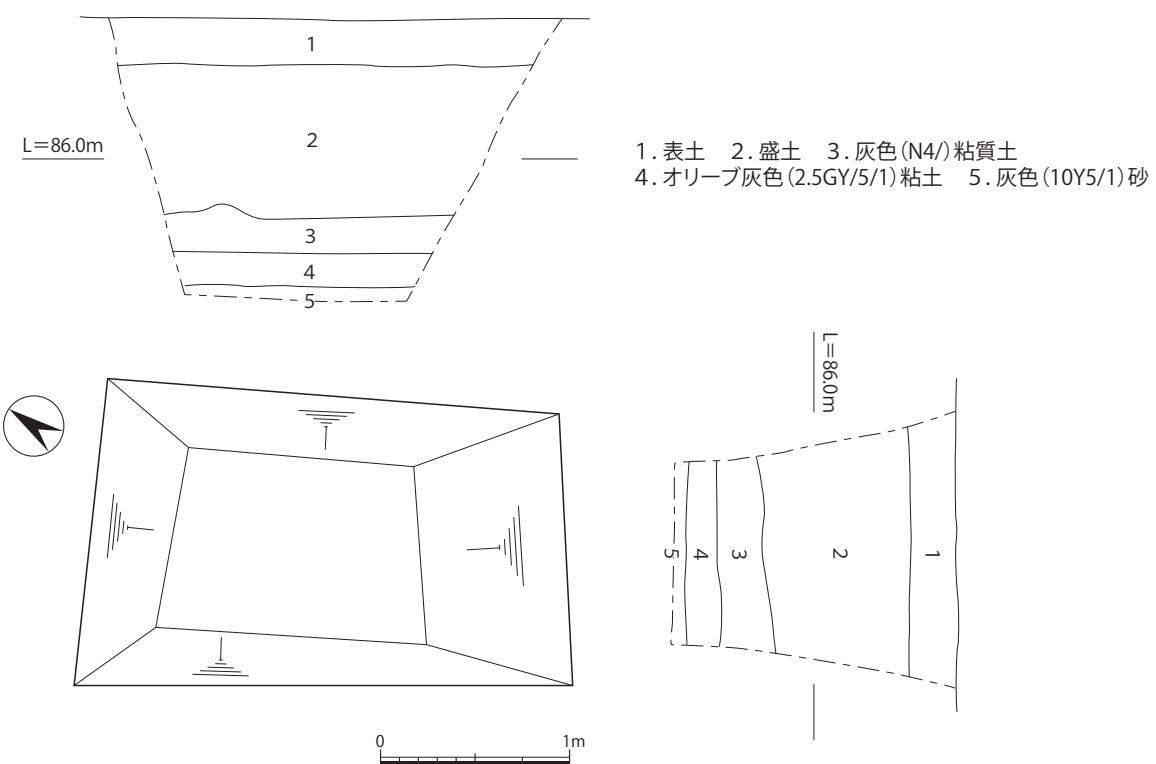


図4 調査区3平面図・土層断面図



調査区1 全景(北東から)



調査区1周壁土層断面



調査区2 全景(北東から)



調査区2周壁土層断面



調査区3 全景(北から)



調査区3南壁土層断面

31. 久野部遺跡

調査地 野洲市久野部字辻 243 番、243 番 1、244 番 1、245 番 1

調査原因 個人住宅

調査期間 令和 3 年 7 月 12 日～令和 3 年 8 月 6 日

1. 調査経過

久野部遺跡は、小篠原から五之里にかけて連綿と続く微高地上に位置する弥生時代から中世にかけての集落跡と周知されている。鎌倉時代前半に創建された圓光寺境内およびその付近においては 6 世紀の古墳が確認されており、調査地は圓光寺からほど近くに位置する（図 1）。

調査は個人住宅建設に伴うもので、建物建築範囲（調査区 1）と擁壁敷設範囲（調査区 2）に計 2 カ所の調査区を設定し、建物建築範囲において本発掘調査を、擁壁敷設範囲において試掘調査を実施した。現地での発掘調査は令和 3 年 7 月 12 日～令和 3 年 8 月 6 日までの間を行い、実働日数は 17 日である。

2. 調査成果

（1）調査区 1（図 2～6）

建物建築範囲に設定した約 132m²の調査区である。地表面下約 0.8m の深さまで掘削を行った結果、最上層には現耕作土（1 層）があり、その下層にかつて当該地が竹藪であったことに起因するとみられる堆積土が部分的に続く（2～5 層）。さらに下層には旧耕作土が 0.4m 程度の厚みで堆積する（6～10、13・14 層）。この旧耕作土下層、地表面下約 0.7m（標高約 94.8m）で地山であるオリーブ褐色粘土層の遺構面を確認した（24 層）。調査区の南東側では、旧耕作土と遺構面の間に、地山系の土が少し汚れたような堆積土が認められる（20～23 層）。調査区の北西側は耕作による削平を受けしており、7 層直下で遺構面に到達する。

遺構はピットや土坑、溝、落ち込みを確認した（図 3）。以下で概要を報告する。

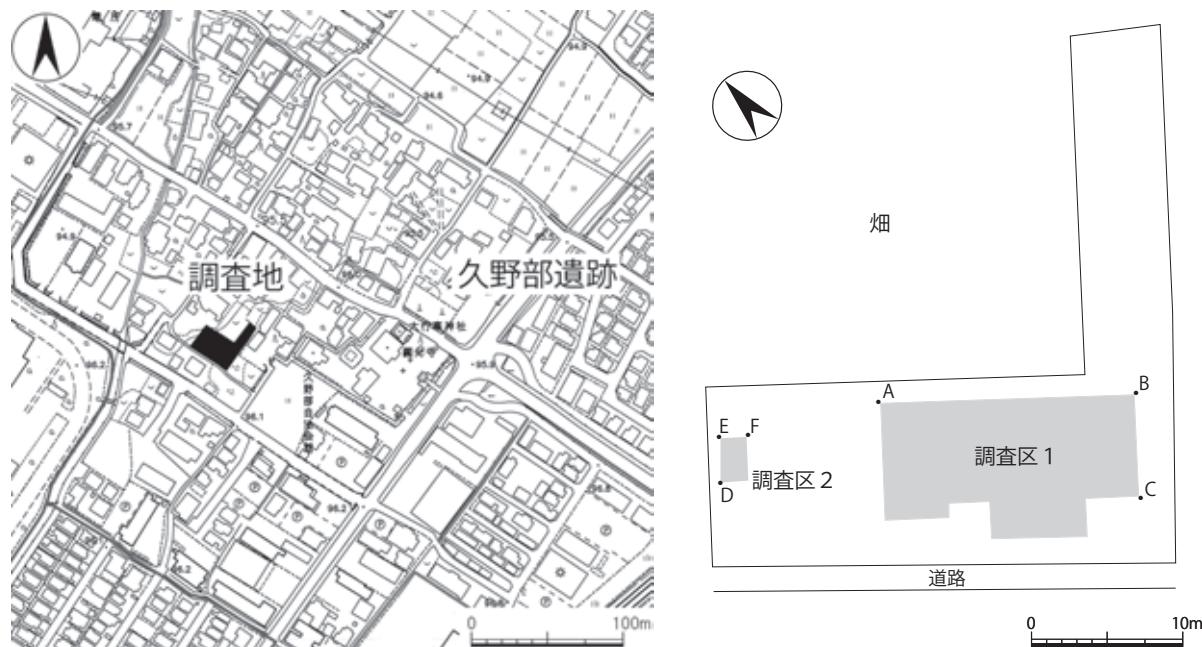
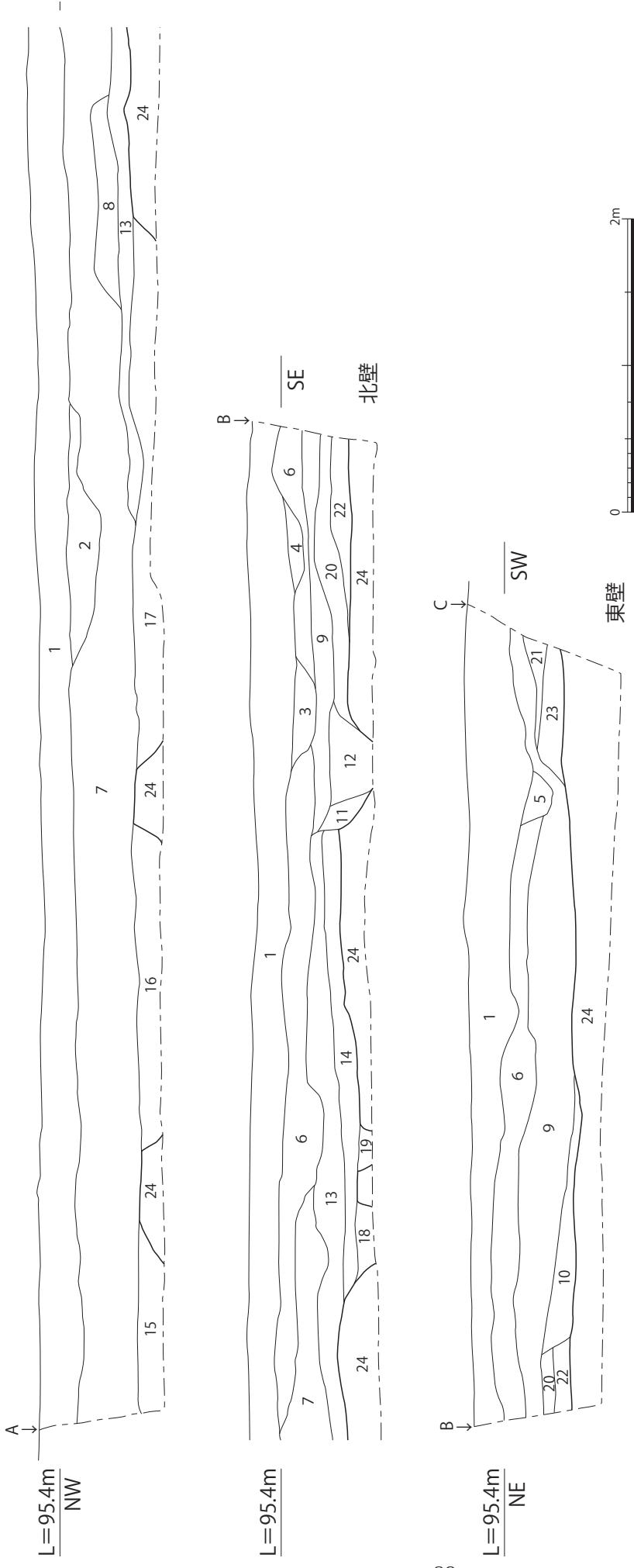


図 1 調査地位置図・調査区配置図



1. 耕作土
2. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 中粒砂 (径 20 ~ 40mm 程の礫を含む)
3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 極細粒砂 (竹根が多い)
4. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 極細粒砂 (竹根が多い)
5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 中粒砂 (竹根が多い)
6. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 極細粒砂
7. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 極細粒砂
8. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 粘質土 (遺物、炭化物を含む)
9. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粗粒砂混細粒砂
10. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 極細粒砂
11. [にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土 (しまりあり)]
12. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 細粒砂
13. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 極細粒砂
14. オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 極細粒砂
15. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 [遺構埋土]
16. [にぶい黄色 (2.5Y 5/3) 粘土 [遺構埋土]]
17. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 極細粒砂 [遺構埋土]
18. 黄褐色 (2.5Y 6/3) 粘土 [遺構埋土]
19. [にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土 [遺構埋土]]
20. 褐色 (10YR 4/4) 粘土
21. [にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 極細粒砂]
22. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘土 (地山系の土でやや濁る)
23. 黄褐色 (2.5Y 5/6) 粘土
24. オリーブ褐色 (2.5Y 5/3) 粘土 [地山]

図2 調査区1土層断面図

31. 久野部遺跡

SD01 調査区のほぼ中央で確認した南北向きの溝である。幅約2.5m、深さ約1.0mを測る。埋土は3層に分けることができ、上層は黒褐色シルト層、中層は黒褐色粘土層、下層はオリーブ黒色砂礫層である（図4）。遺物は上層・中層から弥生時代末～古墳時代前期までの土器片が出土しているものの小片ばかりである。周辺の調査事例では、本調査地から南に約40mの地点で実施された平成14年度の発掘調査⁽¹⁾及び本調査地から南東に約120mの地点で実施された平成9年度の発掘調査⁽²⁾で、同じく南北向きの溝が確認されており、本遺構はそれらの延長と考えられる。これまでの調査からこの溝は、古墳時代前期に掘削され、8世紀前半に埋没した南から北へ流れる溝と評価されている。本

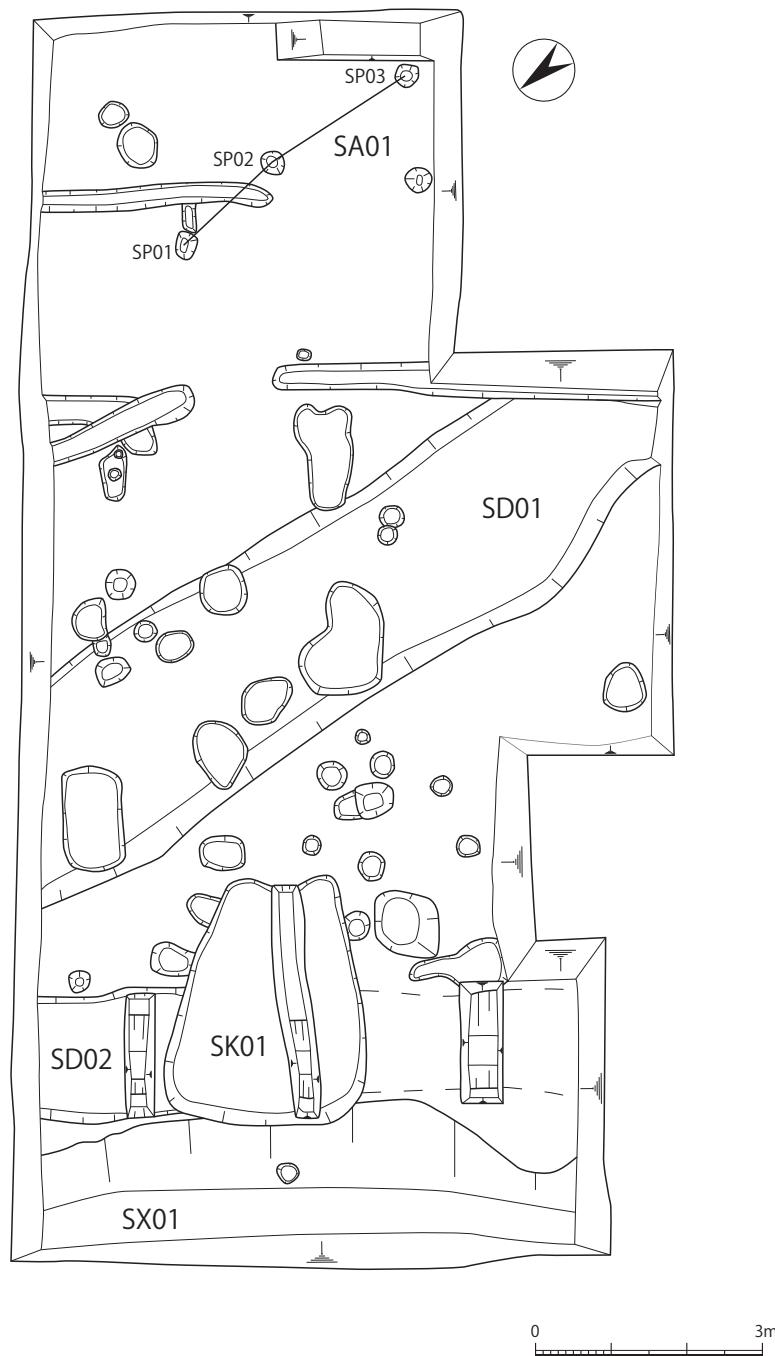


図3 調査区1遺構面平面図

調査の結果からは溝の埋没時期については判断できないものの、掘削時期については、少なくとも弥生時代末～古墳時代前期には機能していたとみられ、これまでの調査結果とおおむね符合するものである。

SD02 調査区の北西側で確認した断面V字形を呈する溝である。幅約1.7m、深さ0.8mを測る。埋土は地点によって異なる様相がみられるものの、基本的には下層に黒褐色粘土層があり、その上にに

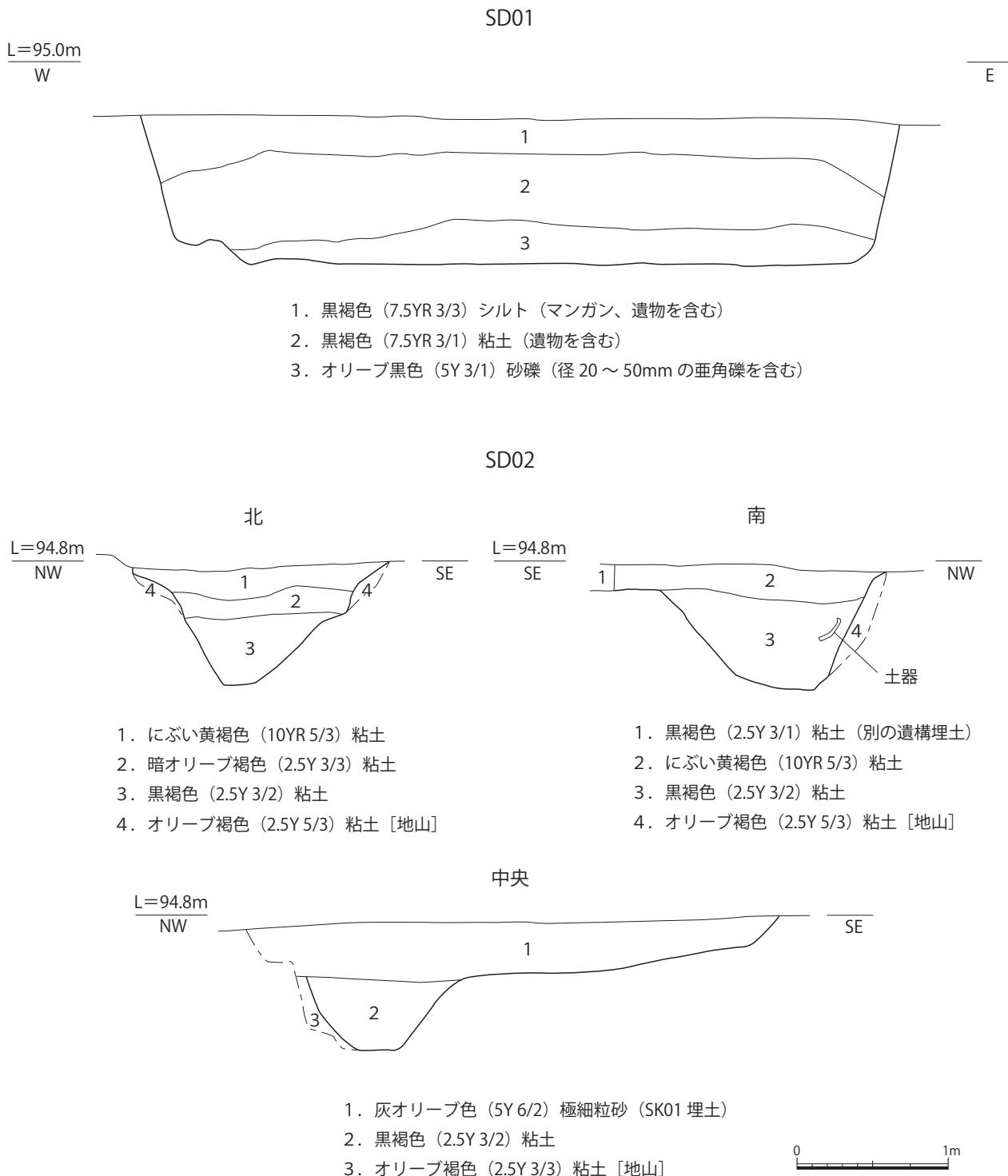


図4 SD01・SD02 遺構断面図

31. 久野部遺跡



図5 SA01 遺構断面図

ぶい黄褐色粘土層が堆積する（図4）。遺物は黒褐色粘土層からは13～14世紀にかけての黒色土器などの土器が出土しており、にぶい黄褐色粘土層からは15世紀以降の土器が出土している。

SX01 調査区の南東側でほぼ一列に並ぶ3基のピットを確認した。いずれのピットも平面円形で直径約0.6mを測り、埋土が黄灰色砂質土（図5）であるという類似した状況を示すことから柵と判断した。遺物は出土しなかった。

SX01 調査区の北西隅で確認した落ち込みである。

調査区端での検出のため幅は不明である。深さは約0.6mを測る。埋土は3層に分けることができ、上層は暗灰黄色粘質土層、中層は明黄褐色粘質土層、下層はオリーブ灰色粘質土層である（図6）。下層はブロック土が混ざっており、水平堆積であることを考慮すると、落ち込みを埋めた整地土とみられる。中層は沈殿した有機物の堆積であり、上層は水田あるいは池沼であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

（2）調査区2（図7・8）

擁壁敷設範囲に設定した約6m²の調査区である。堆積状況は調査区1と大きく変わらず、現耕作土

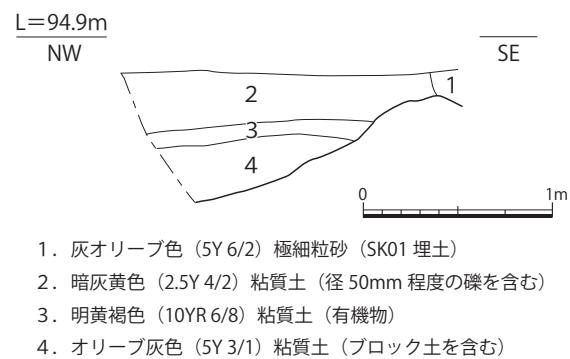


図6 SX01 断面図

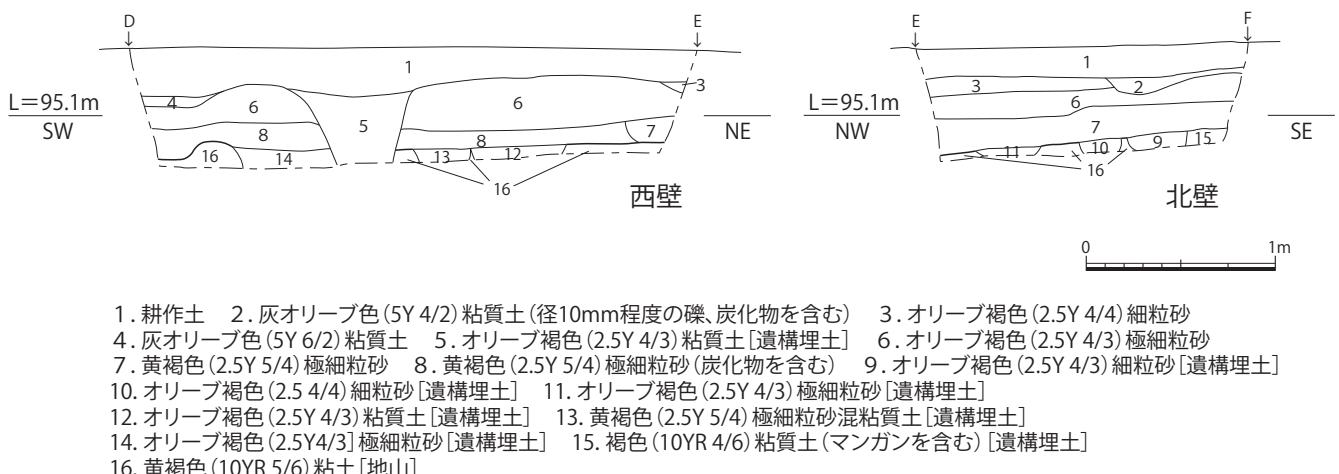


図7 調査区2 土層断面図

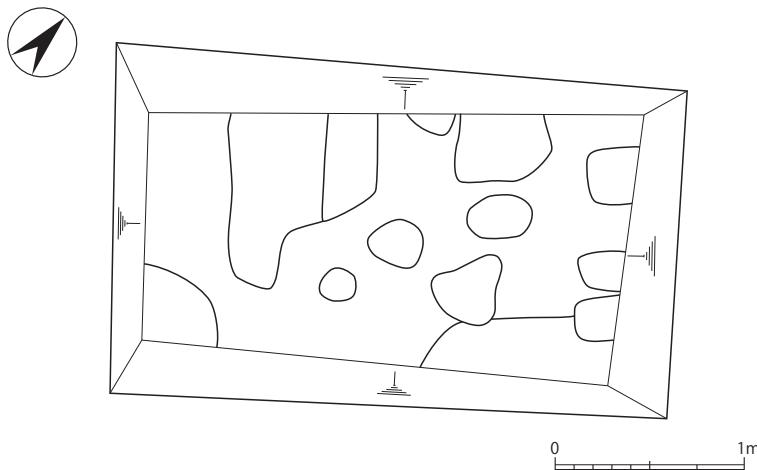


図8 調査区2遺構平面図

(1層)の下に竹藪であったことに起因するとみられる堆積土(2・3層)が部分的に認められ、その下層に旧耕作土(6～8層)が堆積する。この旧耕作土の下層、地表面下約0.5m(標高約94.9m)で地山である遺構面黄褐色粘土層(16層)を確認した(図7)。

遺構はピットや土坑、溝を12基確認したが、工事の掘削深度を超えててしまうため、遺構は掘削せず検出だけで調査を終了した(図8)。なお、調査区1で検出したSX01の続きを確認できなかった。

3. 遺物

今回の調査では、調査区1・調査区2をあわせてコンテナ箱4箱分の出土遺物があった。それらの多くは土師器等の小片が大半であるものの、中には良好な資料も含まれる。以下では、実測図を作成した資料7点について、特徴を述べる(図9)。

1はSD01から出土した受口状口縁の破片である。弥生時代末～古墳時代前期の所産である。

2～6はSD02から出土した。2～5は黒褐色粘土層からの出土で、6はにぶい黄褐色粘土層からの出土である。

2・3は土師器皿でいずれも灰白色の胎土を有し、内面にナデ、外面はユビオサエの後に口縁部上半にナデを施す。2は復元口径8.0cm、高さ1.1cmを測り、3は復元口径7.2cm、高さ1.1cmを測る。

4は黒色土器である。内外面ともに炭素を吸着させていない、いわゆる黒色土器C類で、外方に踏ん張る逆三角形の貼付け高台と、ゆるく斜外方へ開く体部を有する。口縁内部には沈線を施し、内外面ともに摩耗が著しい。復元口径13.2cm、高さ3.8cm、厚さ0.4～0.5cmである。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。焼成はやや悪い。

5は瓷器系の片口鉢である。平底ではなく底部に貼付け高台を有しており、口縁端部を丸みをもっておさめている。外面は体部上半から口縁部にかけて回転ナデを施し、体部下半から高台部にかけて横方向の回転ヘラケズリが加えられている。内面は使い込まれており平滑である。口径33.0cm、高さ12.9cmを測る。胎土は2～5mm程度の長石を含む。13世紀前半の常滑(知多)産と考えられる。

6は土師質の羽釜である。やや内傾する口縁を有しており、断面三角形の鍔が貼付けられている。内外面ともにハケ目調整が施されている。復元口径30.0cm、残存高8.0cmである。胎土は砂粒を含み、色調は浅黄橙色を呈する。

7は土師質の経筒の外容器の蓋とみられる土製品である。外面は不定方向のハケ目調整で、内面にナデを施す。受け部の内側には強いナデが認められる。口径14.4cm、高さ2.5cm、受け部の直径9.0cm

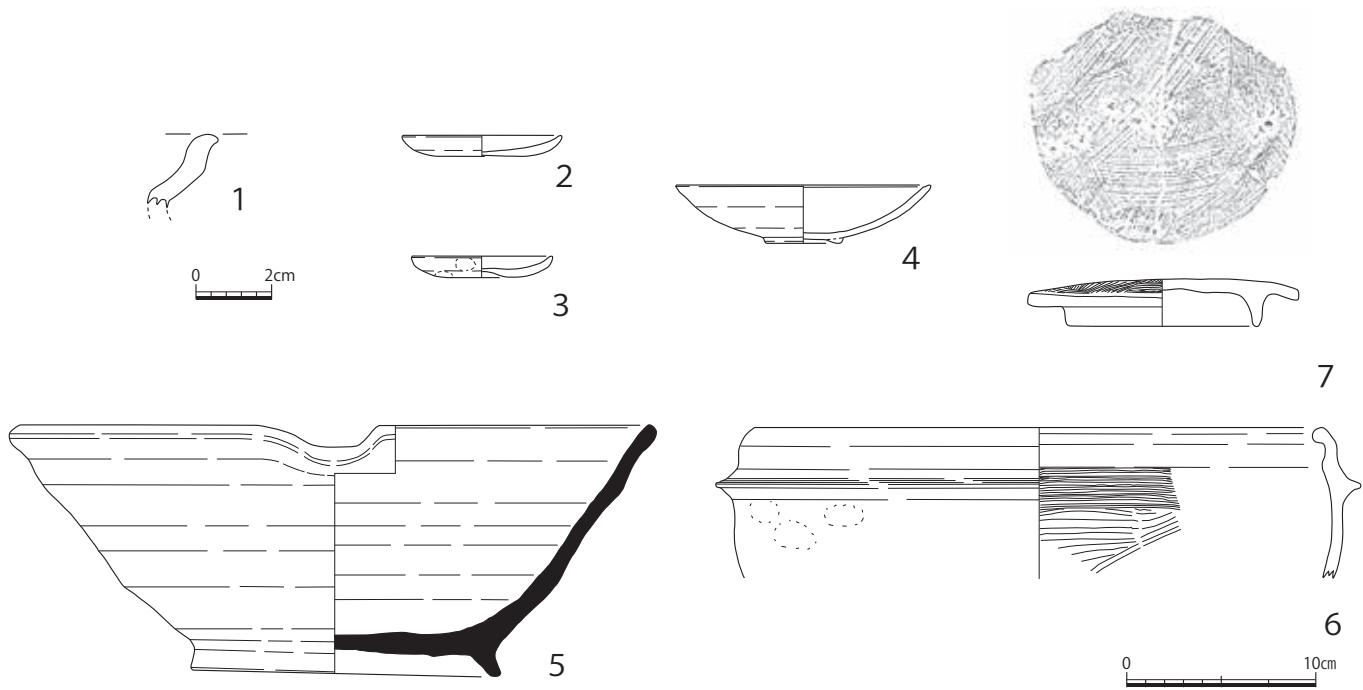


図9 出土遺物実測図

を測る。野洲市内における土師質の経筒の外容器の蓋の出土例は約10例が存在しており、本調査で出土したものは、大篠原東遺跡⁽³⁾や上永原遺跡⁽⁴⁾で出土したものと類似する。

4. まとめ

本調査では、弥生時代末～古墳時代前期の溝から近世の耕作に伴う遺構まで、幅広い年代の遺構を確認することができた。これは久野部の地において、連綿と集落が営まれてきたことを証左するものである。

SD01は小篠原のあたりまで続く、少なくとも古墳時代前期には機能していたと考えられる溝で、この地域一帯で中心的な役割を果たしたものとみられる。SD02は中世集落としての久野部遺跡の一端を示すもので、溝がどこまで巡っているのかが今後の課題である。

遺物では、経筒の外容器の蓋が出土したことは興味深い。圓光寺と周辺の中世集落との関係は大きな課題の1つであり、その問題を考えるうえで重要な資料となりえるだろう。 (芦塚)

- (1) 野洲町教育委員会 2003『野洲町文化財調査年報 2002』
- (2) 野洲町教育委員会 1999『1997年野洲町埋蔵文化財発掘調査年報』
- (3) 野洲町教育委員会 2002『大篠原東遺跡発掘調査概要報告』
- (4) 野洲市教育委員会 2008『平成18年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』